主体の解釈学

1982 年 1 月 20 日の講義（第一時限）pp.95-125

K 原

＜今回（一時限目）＞

◆ 今回は紀元１世紀から２世紀にかけての、自己への配慮の黄金時代の時期を扱う。この時期は、ローマ帝国成立の時期であり、ヘレニズムの古典文化復興、キリスト教の普及の時期である。

◆ 『アルキビアデス』で見られた自己への配慮の特徴は、紀元１世紀から２世紀には消し飛んでしまったように見える。

◆ 自己への配慮は２つの軸、次元で一般化されていった。個人の生そのもののなかでの一般化（＝いかに自己への配慮は個人の生全体に及ぶようになるのか？）と、自己への配慮が、あらゆる個人（全員）に及ぶようになる一般化である。

◆ この時期の自己への配慮は、身分や地位に関わらず全員に課されるものとなり、思春期の終わりから成年期へとその重心が移動していった。また、その目的は他者（都市）を適切に統治するためではなく、自己自身を目的とするようになった。さらに、自己への配慮は、認識の問題というだけではなくなり、批判の実践と結びつき、育成的側面と矯正的側面の２つの側面を持つようになっていく（特に矯正的側面が重要）。

◆ これによって、己の実践が批判的な機能を持つようになり（第一の帰結）、また魂は手当て（＝解放、矯正）されるものであって、哲学は病を治すためのものだと捉えられるようになった（第二の帰結）。

『アルキビアデス』から紀元 1 - 2 世紀にかけての自己への配慮 大きな変化（pp.95-8）

- 今回は、紀元 1 世紀から 2 世紀にかけての時期を扱う。なぜならこの時期が、自己への配慮の歴史における真の黄金時代であるように思われるため。この時期はヘレニズムの古典文化復興の時期であり、キリスト教の普及と、キリスト教大思想家の登場の直前までを見ていく（ローマ帝国成立の時期でもある）。

『アルキビアデス』での自己への配慮の特徴

1. 自己への配慮の適用領域（対象者）が、若い貴族たち（権力を行使する立場）であること。
2. 自己への配慮に目的や正当化が見られ、自分が持つことになる権力を、適切に、道理にかなった仕方で、高潔に行使することができるようにするためだった。
3. この時点では、自己へ配慮するということは、自己を認識するということだった。

紀元１～２世紀の自己への配慮

↑の特徴が、この時期には消し飛んでしまったように見える（ただし、その変化は急激なものではなく、長い変化を経てようやく消滅した）。

epimeleia に関する語彙論的研究（pp.98-9）

- プラトンからニュッサのグレゴリオス（4 世紀のキリスト教神学者。「神父のなかの神父」との異名がある）にいたるまで繰り返し出てくる、epimeleisthai heautou（自己に専心する、自己を気に懸ける、自己へ配慮する）という表現の意味について詳しく述べる必要がある。epimeleisthai heautou という表現自体の意味が、単なる心の認識というだけではなく、実践的な意味へと変わってきた。さまざまな実践のなすひとつの全体を指している。

表現の布置（pp.99-100）

epimeleisthai heautou は、さまざまな実践のなすひとつの全体を指す表現であり、４つに分けられる。

1. 生存の包括的な運動に関わるような語彙（例：自己に注意すること、視線を自己に向けること、自己を吟味することといった行為）

2. 行動、態度を指す表現（例：自己のうちに引きこもる、事故のうちに退却する、自己自身の最深部に下る など）
3. 自己に対する特殊な活動、振る舞いに関わるもの（例：医学的なもの…自らを手当てしなくてはならない、自らを治療しなくてはならない　など　法的なもの…ひとが自己にたいして持つ権利を行使しなくてはならない　など　隷属状態にあるので、自己を解放し、自由にしてやらなくてはならない 宗教的なもの…自己を礼拝しなくてはならない、自己を前にして恥を知らなくてはならない　など）
4. 自己に対するある種の恒常的な関係を示すもの（例：至上権をふるう…自己の主人となる、感覚的なもの…自己に対して快楽を感ずる、自己を前にして幸せである、自己に満足している　など）

- ↑より、epimeleisthai heautou が表す、認識ではなく自己の実践に関する一連の表現があるということになる。

自己への配慮の一般化 生存の全体との共外延性という原則（pp.100-1）

- この時期に自己への配慮が一般化されていった。この一般化は、２つの次元、２つの軸にしたがって行われている。
    1. 個人の生そのもののなかでの一般化（＝自己への配慮が個人の生全体に及ぶようになった）→生の技法と同じ広がりを持つに至った（＝生存の全体との共外延性）
    2. 自己への配慮が、あらゆる個人（全員）に及ぶようになる一般化

＝＝以下、１つめの一般化についての説明が続く（２つめは、一限ではこれ以降取り上げられていない）＝＝

- １つめの自己への配慮の一般化に関して、アルキビアデスの時代の kairos カイロスとは、ある出来事が起きる、その特殊な状況を指すものだった。この時期、この機会はギリシア語ではホーラと呼ばれており、これは自己に配慮しなくてはならないような人生の時期、生存の季節のことである。この生存の季節とは、教導、恋愛術、そして政治にとっての例の境界年齢のことで、青年が人生に踏み出し、権力を行使しなくてはならない時期を指す。
- これまで、あらゆる社会において、青年の成人への移行は、強力に儀礼化されてきた。しかし、少なくともアテネにはこのような移行の制度がなく、それが嘆き悲しまれてきた。だから、アテネの教導は青年を確実に成年に移行させることができないとされ、それに対する批判がギリシア哲学に恒常的に現れる特徴となっている。このような時期においてこそ、ソクラテス＝プラトン的契機は形成されてきた。→自己への配慮は恒久的なものではなく、自己への配慮期間がある（生存の季節＝一時的、境界年齢のとき）ことが、その当時のあらゆる社会のデフォルトだった。しかし、アテネにはそれがなかった。

テクストの読解 エピクロス、ムソニウス・ルフス、セネカ、エピクテトス、アレクサンドレイアのフィロン、ルキアノス（pp.102-8）

- プラトン以後、自己への配慮は生涯続かなくてはならない恒久的な義務となった。

例１：エピクロスの「メノイケウスへの手紙」

「自分の魂の世話をするという活動の目的とは、幸福に到達するということだが、これは人生のあらゆる時期において実践されなくてはならず、若い時も、年老いてからも実践されなくてはならない」と書かれている。ただし、これには２つの異なる機能があり、若いときに問題なのは、人生に対して自らを準備し、武装し、生きてゆくために必要な装備を身につけること。他方、老年の場合は、若返るということ。

→つまり、若い時だけではなく、いつでも哲学し、自己へ配慮することをやめてはならない、ということになる。

例２：ストア派　ムソニウス・ルフスのテクスト

「絶えず自らに手当することによってこそ、ひとは自らを救うことができる」自己への配慮は一生の仕事

例３：セネカ『心の平静について』の冒頭、セレヌスがセネカの意見を求めている場面

セレヌスがセネカに対して、自分の心持ちを説明し、忠告してくれ、診断を下してくれ、魂の医者の役割を演じてくれと頼んでいる。このセレヌスという男は、アルキビアデスとは全く違う男で、田舎の若者だった（名士の家柄でセネカの遠縁）。ローマにやってきて、政治家および宮廷人としてのキャリアを積み始めていた。つまり、セレヌスは既にひとつのキャリアを選択して歩み始めたところで、セネカに語りかけている。

例４：セネカとルキリウスの往復書簡

ルキリウスはセネカより 10 歳ほど若く、当時 40-50 代だったことになる。セネカはルキリウスに、きちんと理論化されていないエピクロス主義をなんとか捨てさせ、厳密なストア主義へ向かわせようと企てていた。

→若くないけど変形が起こっている。

例５：エピクテトス

教師を生業とするエピクテトスは、セネカとは異なり、学校を持ち、生徒をかかえていた。生徒の中には多くの若者がいて、教育を受けていた。その生徒たちについては、彼らがしっかり指導されており、かなり規律正しい一種の寄宿学校にいたということがはっきり示されている。だから、自己への配慮は大人の、成人向けのものだけとなったわけではない。しかし、エピクテトスの学校には、成人向けの「外来」とでも呼んでいいようなものがある。この人たちはエピクロス主義者で、エピクテトスに意見を求め、質問をしにやってくる。エピクテトスは自分の生徒たち（＝若者たち）に、彼らの町の名士をつかまえて、次のように言って少々揺すぶってやれ、と助言している。「しかしあなたは、どのように生きているのですか。あなたは本当に、自己へ十分配慮しているのですか」。→生徒たちより年が上と思われる町の名士が自己へ配慮しているのか問うている＝自己への配慮は、若者のものだけではない。あと、犬儒派の活動も例に挙げられていた。

例７：アレクサンドレイアのフィロン

アレクサンドロイアのフィロンの、あるテクストに書かれているテラペウタイ派の集団について、アレクサンドレイアの周辺に存在した修練的な集団で、その目的の１つが魂の世話をすることだった。しかし、ここで言われている魂の世話は、『アルキビアデス』で見られた魂の世話とは正反対になっている。例えば、自分がすでに死すべき命を終えたと信じ、財産を息子や娘、近親者に譲り渡したり、遺産相続人をはっきりと立てたりする。そして、自分の魂に配慮するようになる。人生の終わりに自分に配慮するのであり、始まりにおいてではない。ひょっとすると成年機から老年期への移行こそが、いまや自己への配慮の重心になっているかも。

例８：ルキアノスのテクスト『ヘルモティムス』

２人のあいだの議論が出てくる。２人の会話から、ヘルモティムスはその当時 60 歳であり、40 歳から彼が哲学の先生につきだして、20 年になるといい、60 歳にして道半ばまできたということになる。ピュタゴラス派では、人の人生を 20 年×4 つの時期に分けていた。だから、境目ということになる。ピュタゴラス派では、20-40 歳が思春期、40-60 歳が若者、60 歳以降が老人。ヘルモティムスは若者の時代が終わって、20 年にわたり哲学を修めてきた。リュキヌスが「ちょうどいい、私は 40 歳つまりちょうど自分自身を教育すべき年齢だ。私の導き手となって、手を引いておくれよ。」

- ここまで見てきた具体例をふまえると、自己の配慮の中心が、思春期から離れて壮年期へ、あるいは壮年期の終わりへと、定め直されたりずらされたということになる。これはいくつかの帰結を導く。

この一般化の倫理的な帰結　人格形成と矯正の軸としての自己への配慮（pp.108-）

- 自己への配慮が思春期の終わりから成年期へと時期的に移動したことの第一の帰結は、自己への配慮の一般化によって、自己の実践が批判的な機能を持つようになり、人格形成（育成的側面）と矯正的側面を持つようになったということ。『アルキビアデス』のときは、自己への配慮は職業や社会的活動への準備だった。でも、ローマの時期は、挫折を然るべく耐え忍ぶことができるよう彼を育成するということになる。育成的側面は矯正的側面と分離することは絶対にできない。そして、この矯正的な側面こそが次第に重要になって

いったとのこと。

- 自己の実践は、すでに成立ししっかり身に着いてしまっているものを揺さぶることが必要な、変形や依存を背景として要請されるようになる。

  例：セネカのルキリウス宛書簡第五〇「悪は私たちの外にあるのではなく、私たちの内にあるのだ」「若いうちはまだ矯正は容易い」「魂の良さは、その欠点のあとにはじめて出てくることができるのだ」「美徳を学ぶということは、悪徳を忘れることだ」

  →私たちの内側にある悪を追い出し、そこから自分を解放するために（＝自己の矯正のために）自己の実践に励まなくてはならない。この自己の実践は矯正のためのものであって、育成のためのものではない。自らを訓練しなおし、矯正し、あるべき姿、しかし一度もそうであったことのない姿になることができるようにすること。

- そうなると、自己の批判的再形成が起こる。この時、人間の個人には、年齢を問わず一度も現れたことがない本性を－基準として行われる自己の改革が、すでにこれまでに受けてきた教育や出来上がった習慣、環境のこすりおとしといった様相を当然のこととして呈することになる。自己への配慮は家族によって伝えられ矯正される価値観の体系をすっかり裏返さなくてはならないものになった。**プラトンのイデアはどうか？**
- 教育による人格形成の批判、教師の批判（いわゆる初等教育の教師の批判）、とりわけ弁論術の教師への批判がある。ここで、一方で哲学の実践および教育と、他方で弁論術の教育とのあいだの一大論争へ踏み込むことになる。**一大論争については、よくわからなかった。**

  例：エピクテトスが、まだ若い弁論術の生徒がやってきたのをからかうところ

  修辞学の学徒が、チャラチャラした格好で登場する。これは、弁論術の教育が装飾（＝見せかけ、誘惑の）教育であることを示している。ということは、ここで問題になっているのは、弁論術の教育とは自己へ配慮することではなく、他人に気に入られることということになる。エピクテトス「君は自己へ配慮していると思い込んでいる。しかし（中略）自己へ配慮するとはどういうことだろうか。」自己へ配慮するとは何か、自己とは何か。再び、それは自分の魂に配慮するということであり、身体に配慮するということではないということに行き当たる。

- 自己への配慮が思春期の終わりから成年期へと時期的に移動した、その第一の帰結は、己の実践が批判的な機能を持つようになったということだった。

医術的な活動と哲学との比較（共通の諸概念 治療目的）（pp.112-25）

- 自己への配慮が思春期の終わりから成年期へと時期的に移動したことの第二の帰結は、<u>自己の実践と医術とが非常にはっきりと、非常に目立ったかたちで近づけられるようになった</u>こと。

  例：ムソニウス「ひとは、病気の時に医者を呼ぶのと同じように、哲学者を呼ぶ。その魂にたいする働きは、あらゆる点で医者の身体にたいする働きと類比的である」プルタルコスもそう。

- この医術と哲学のあいだの概念的枠組み、概念的骨組みの同一性によってはっきり現れている。その中心にはパトスの概念がある（パトス：アリストテレス倫理学で情念を表す。一時的な感情状態）。このパトスは、エピクロス派でもストア派でも情熱および病気という意味で了解されており、そこから一連の類比が出てくる。

  例：ストア派は、恋の情熱のたどる変遷を病気の進行のように描写する。

  1. 第一段階：病気にかかりやすい体質
  2. 第二段階：病気の慢性化
  3. 最終段階：個人が完全に歪められ、病に冒され、すっかり取り憑いてしまった情熱のなかに埋没してしまう時期

- もっと興味深いのは、<u>哲学により規定され、指示され、処方される自己の実践そのものが、ひとつの医術的</u>

操作のように考えられているという点。その中心には、テラペウエインという概念がある。ギリシア語ではこの言葉は１）治癒し、手当することを目的とした医術的行為　２）命令に従い、主人に仕える奴隷の活動３）礼拝をおこなうこと　である。だから、テラペウエイン・ヘアウトンは、自らを治療すること、自らに対して仕える奴隷であること、自らを礼拝することを意味することになる。

例：アレクサンドレイアのフィロン『観想的生活について』中にある根本的テクスト

テラペウタイ派が取り上げられている。このテクストの冒頭で、フィロンは、彼らが自分たちのことを「治療者（テラペウタイ派)」と呼んでいると言っている。なぜなら、彼らが医者が身体を手当するように魂を手当するからだ。彼らは＜存在＞を手当し、魂を手当する。この二つを同時に行ってこそ、＜存在＞の手当と魂の手当ての関連においてこそ治療者を名乗ることができる。

- 哲学と医術のあいだ、魂の実践と身体の医術のあいだに次第に強調され、際立ってきた関連には３つの強調されるべき要素がある。なぜ強調するのかというと、それが特に実践に関わるものだから。

1. 自己への手当てを実践するために集まった人々の集団、あるいは哲学の一学派は、実際は魂の施療院（ディスパンセール）なのだということ。手当て（＝矯正）を受けるためにそこへ訪れる。

例：エピクロスの第二巻の第二一章

生徒たちは「哲学を少々学びたい、三段論法の技法を身に付けたい」とやってくるが、エピクロスは「君たちがここにいるのは、本質的には病を治すためであるということを覚えておかなくてはならない」と言う。だから、「三段論法を習おうとする前にまず「潰瘍をなおし、下痢をとめ、考えを落ち着けるがいい」「哲学の学校、それは施療院である」

※ 残り２つの要素については二限に続く模様（テープレコーダーの問題により、第一時限は中途半端に終わっている）